
あの、そこ私の席なのですが

道案内

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの、そこ私の席なのですが

【Zコード】

Z9779Y

【作者名】

道案内

【あらすじ】

偶然、自分の席に座るクラスメイトを目撃してしまった加奈。その日以降、彼の数々の行為に振り回される羽田。無口美形ワンコに溺愛される平凡少女のお話です

あの、そこ私の席なのですが

「……」

慌ただしく教室の扉を開けた桑原加奈は、目の前の光景にそのままの姿勢で固まった。

三時間目と四時間目の間の休み時間。次は移動教室の為、人はほとんど残っていなかつた。加奈も途中でノートを間違えた事に気づき、あわてて引き返してきたのだ。

教室の中に残っていたのは二人の男子生徒。

「あつちやー……」

此方を見て、気まずげに顔を引きつらせるクラスメイトの松本君と、……気のせいでなければ加奈の席に座り、加奈の机にしがみついているもう一人。

「……」

窓際の後ろから一番目、そこは間違いなく加奈の席だ。

此方に後頭部を向けている人物の頭は、上下に激しく揺れている。頬を机にスリスリと擦りつけて……擦り、付け……。

「荒川、荒川」

立ち尽くす加奈に背を向けて、誰かさんの肩を揺する松本君……
・・・つて荒川君！？

「……なんだ、邪魔するな」

顔も上げず、不機嫌そうに答える荒川君らしき人、……といふか邪魔つてなんですか。

「いやいや、ほら、見られちゃったから」

「だから邪魔す、……なに?」

のつそりと松本君を見上げた荒川君の視線が、扉の前で立ち尽くす加奈の方へと向き、止まった。

切れ長の一重の目を見開き、微動だにしない荒川君らしき人、……いや荒川君だね、うん。何してるのさ、荒川君。人の席で。その両手は未だに加奈の机をしかと握りしめたままだ。

「「「……」」

三人の間に、とてつもなく重い空気が流れる。その静寂を破り松本君が口を開いた。

「あー桑原さん、どしたの?」

「……それはこいつの台詞なんだけど」

「……だよねーあは、は、はは」

松本君のわざとらしい笑いが響く中、荒川君は此方をじっと見つめたままで動かない。

その視線の激しさに、加奈の方はとても荒川君を見返せない。

「あーやばいよー次始まつちやうよー」

白々しさも全開の口調で松本君は言い、荒川君の腕を掴むと、ぐいぐい引きずるように加奈の横を通り過ぎ

「桑原さんも急いで急いで、遅れるよー」

そのままズルズルと荒川君を連れ、出て行つていった。その間も荒川君の熱視線は外れ今まで。

「……なんだつたの」

どつと疲れを感じながらも、ノートを取り出すために机に向かう。……一応、我が机に何かされてないかもチェックするためにも。

意味が分からぬ

結局、次の授業へは少し遅れてしまった。いや、だつてほら、異常がないか念入りに調べてたら……ねえ。

すみませんと頭を下げた時も、とある方向から重い視線を感じるような……気のせいだよね。

教室での席がそのまま反映されているので、窓際後ろから一番田の席へと腰を下ろす。

「えーそれでは、教科書23ページの……」

教師の言つままにページを開くも、内容なんてちつとも頭に入つてこない。

思い浮かぶのは先程の出来事ばかりで。……結局あの一人、とうか荒川君は私の机で何をしてたんだろう。何やら机に頬擦りでもしてたように見えたけど……いやいや、そんな馬鹿な。

あの二人、タイプは違うものの、一人揃つて超モテ男だし。

華やか美形の松本啓介君。

ふわふわの茶色い癖つ毛に、甘い垂れ目の整つた顔立ち。巧みな話術で距離を縮め、常に数人の女の子と付き合つているといつ噂。

……さつきみたいにきこちない松本君なんて初めて見た気がする。常にある余裕オーラもなんか消えかけてた感じだし……んー?

そして問題のもう一人、冷徹美形の荒川祐也君。

常に無表情なその顔は凄まじく整つていて、一切の隙がない。癖のない黒髪に切長の瞳。三秒目が合つたら、どんな女でも惚れさせるといつ逸話さえある。

最も、告白してきた女の子は全て一刀両断してゐるらしいんだけど……つってイタイイタイイタイ。何だか痛い気がする。体の右側が凄まじく痛い。

ちなみに

私、窓際後ろから一番目。

荒川君、廊下側の一番後ろ。

おまけで松本君、私と同じ窓際の一番前。

まさかと思いつつ、チラリンと右斜め後ろを向く……ええええつ！

め、目、目が合つた……！！

一番奥の人と（荒川君なんだけど）合つちゃつたよーーー

「……」

確認。

……ええええっ。私、何かしましたでしょうか。

うろたえたら負けだ

あと10分、あと10分。

チケチケくる視線に耐える」と30分、心なしかお腹も痛くなってきた気がする。

「え、次に、問2と問3を」

あーもー早く終わつ

「荒川、桑原。前に出て解いてみろ」

「あ、へえええっ、なんですか！？わ、私ですか。顔が引きつるのが分かる。

「なんか集中してないからな、お前ら。」

化学担当の山下先生が、半笑いで語つてくる。

卷之三

「ううう、ツイでない。泣く泣くノートを片手に立ち上がる。ガタツともう一人も立ち上がる音も聞こえる。こうなつたら、さつさと終わらせて席に戻ろう。幸いなことに答えは分かつてゐるし。

周りを見ないように足早に黒板へと向かう、松本君の傍を通りぬけようとした途端、はちよびっと息をつめてしまつたけど。

えーと、チョークチョーク……

……え？

ピキッと教室の空気が固まつたような気がする。 といつのも全て、
私のすぐ横にいらっしゃる方のせいなのですが。

（回想）

えーと、チョークチョーク。あ、あつた…………え？

私がチョークを握んで三秒後、私の手に一回り大きな手が重なりまして。横を見やれば荒川君。

あ、なるほど。荒川君もチョークを探してたんですね。にしては三秒のズレがあつたような気もしますが。では、コレは譲りますよ。私は他のを、他のを……

（回想終了）

……あの、手を放してください。

「……あー、荒川？ どうした？」

静まり返った教室に、山下先生の声がむなしく響く。

先生っ、もっと言つてやつてくださいっ！ 明らかにこの方、おかしいんです！

背中を冷たい汗が伝い落ちる。う、動けない。これから私にどうしようと……っ。

俯いた視線の先に、私の手をがつしりと掴んでいる手が映る。ちょっと力を入れてみるも全く動かない。チヨークが欲しいなら譲りますからっ、まず手を離してくださいいいいっ。

ぐつぐつと静かな攻防が繰り広げられる中、ガタッと誰かが椅子から立ち上がる音がした。縋るよつた思いでそちらに目をやる。

「荒川、荒川」

「ううう、とまるで野生の大型動物をなだめる様に、松本君が歩み寄ってきていた。

「あーー」めんね、桑原さん。どうもコマイシセッキの振りきつちやつたみたいで」

苦笑しながら、何やら訳の分からぬ事を言つ松本君。フリキッタつて何ですか？

「ほり荒川、お前もいい加減にしつけよ、授業中だぞ？」

ポンポンと荒川君の肩を叩く松本君。それに合わせて恐る恐る荒川君へと視線を向けると、私より20センチは高いであろう顔と目が合つ。

「…………」

氣のせいでしょうか、握られた手に更に力が入ったような……。

「あー……お前ら、とりあえず席戻れ」

山下先生の疲れたようなような声に、ぎこちなく、握つたまんまだ
つたチヨークを放す。

えーっと席に戻れだそうですよ、荒川君。つて松本君、さつさと戻
らないでください。この人を置いていかないでください。

不意にグイッと手を引かれる。え、え、と混乱状態で、荒川君に手
を引かれるまま歩きだす。

ひいいいつ、し、視線が、視線が刺さる。あえて見ないふりをして
いましたけど、クラス中の視線がグサグサ刺さつてゐる。いつそ氣
を失いたくなる中、自分の席へとたどり着く。

……あ、荒川君の席はこの列じゃないんですけど、なんですか、わざわざ連れてきてくれたんですか手を繋いで……「ひつ」。

あ、はい座ります。椅子を引いてくれなくとも座りますから。荒川君もどうぞ自分の席に戻つてください。ってなんですかー?なぜ手を握つているのとは逆の手で頭を、頭を撫でるのですか……?

そのまま、クラスメイトがガン見する中、チャイムが鳴るまで撫で続けられた。
……席に戻つてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9779y/>

あの、そこ私の席なのですが

2011年11月30日20時49分発行